

早稲田大学 文化構想学部 国語 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク式・記述式併用
試験時間	90分(現代文2問、現古漢1問)
難易度	昨年比、易化

〔大問別講評〕

(一) 評論文。「『老子』に関する古代文献学」について。

出典:A:子安宣邦『近代知と中国認識』。

B:武内義雄『老子原始』。

《本文字数:約 3600 字＝昨年より約 2900 字減少。設問数:7＝昨年より1問増加。》

小問	難易度	コメント
問一	やや易	【傍線部理解】43行にある。傍線部1の前後と同様の語句があるので難しくない。
問二	やや易	【空欄補充】空欄Xを含む部分は、7行からの武内の引用論文の解説であることから、容易に判断できる。
問三	やや難	【傍線部理解】道家以外の思想を削除した後に、武内が判定に用いた規準を探す。Bの(三)の中にある。
問四	やや難	【傍線部説明】傍線部3は、Aの文章の筆者が、武内の古代文献学の方法を批判している部分である。ニは、「各派所伝の老聃の言……を取り入れる」が不適切。
問五	標準	【傍線部理解】儒墨より後発の道家が、「儒墨の堯・舜・周文・夏禹に拮抗する」ために必要とした権威である。傍線部4の次行に「黄帝四経」とある。
問六	標準	【空欄補充】Bの2～3行から、有韻の部分が残すべきものであり、無韻の部分が除去すべきものだとわかる。a・eに除去すべきもの、b・c・dに残すべきものが入る。
問七	標準	【趣旨合致】ハは、Aの文章の著者の主張としている点が不適切。武内の主張である。ホは、「黄帝四経などを取り除いた」とする点が不適切。黄帝四経を集成し権威付けに利用したのである。

(二) 随筆文。「人類の死の意識の始まり」について。

出典:日野啓三『断崖にゆらめく白い掌の群』。

《本文字数:約 2900 字＝昨年より約 100 字減少。設問数:7＝昨年より1問増加。》

小問	難易度	コメント
問八	標準	【理由説明】20～21行「意識の奥の光景…」、33～34行「深層の震え…」が根拠となる。イは、「…よりもずっと精巧な…」という比較は本文になく不適切。
問九	標準	【傍線部説明】56～57行に「記号…は描かれる前にすでに意識化されたもの」とあることがヒント。イは、「哀悼を表現するため」が不適切である。
問十	やや易	【脱落文挿入】消去法が有効だろう。イ～ニに入らないことは明らかである。
問十一	やや難	【理由説明】消去法が有効だろう。イも前半の内容は本文からは読み取れないが、ハの「自らの主張が矛盾をきたす…」以下は、理由として全く不適切であることからイを選ばざるをえない。
問十二	標準	【空欄補充】空欄Iの3行前の「意識の奥からつきあげてくる…」もの、すなわち身体的なものである。「実存」という語がそのような具体的・個的なものを意味することは理解しておきたい。
問十三	やや易	【趣旨合致】ロは、後半が明らかに不適切である。
問十四	標準	【漢字書き取り】1＝「顔料」(絵の具のこと)という語を知っていたか。2＝「知見」(見て得た知識、見識)は易しいだろう。

(三) 甲＝現古漢融合文。『徒然草』について。

出典：甲＝永積安明『徒然草を読む』。乙＝『帝範』『務農篇』。

《本文字数：合計約 3300 字＝昨年より約 57 字減少。設問数：10＝昨年と同じ。》

小問	難易度	コメント
問十五	標準	【理由説明】24～29行目から判断する。ハは前半が不適切。
問十六	やや易	【文法】「に」の識別。基本である。
問十七	標準	【文学史】『十訓抄』は鎌倉中期の説話集。ホは「源通具」に着目し、『新古今和歌集』（鎌倉初期）のことだと見抜く。
問十八	やや難	【傍線部理解】「七歩の詩」と『徒然草』第六十九段の内容を正確につかんで判断する。
問十九	標準	【空欄補充】『徒然草』の第四十段・第四十二段に間接経験過去の「けり」が多く使われていることに着目する。
問二十	標準	【理由説明】最終段落から判断する。
問二十一	標準	【空欄補充】一つ目の空欄の直後の内容、または、次段落の内容から判断する。
問二十二	やや易	【空欄補充】C＝直後の「衣食…廉恥」との対比関係から。D＝直前の「家無…之服」との因果関係から。C・Dが分かれば正解を出せる。
問二十三	標準	【理由説明】前の「莫若…之路」から考える。
問二十四	やや易	【趣旨合致】イは甲の『徒然草』第六十八段に、ホは乙の1行目に合致する。

〔総合コメント・今後の指針〕

全体的に昨年より易化した。昨年は、大問二で 60～80 字の記述問題が出題されたが、今年はお題されなかった。本学部は、例年は相当な分量だが、今年は大問一の本文が約 2900 字減少し、制限時間内に無理なく解ける分量であった。高得点勝負になるかもしれない。

大問一は、『老子』に関する古代文献学についての評論文。昨年より設問は1問増加したものの、本文の分量が大きく減少し、やや易化した。例年よりは取り組みやすかっただろう。

大問二は、「人類の死の意識の始まり」についての随筆文。昨年より設問は1問増加したものの、記述問題がなくなり、やや易化した。基本・標準レベルの設問でしっかり得点しておきたい。

大問三は、『徒然草』についての現古漢融合文とそれに関わる漢文。昨年よりやや易化した。ここでも、基本・標準レベルの設問はしっかり得点しておきたい。